

# 「大坂の陣、その顛末」

## 天下静謐への家康公の覚悟とは

講師 市橋 章男 氏

### ◆講師プロフィール〔略歴〕

1954年岡崎市生まれ。國學院大學で史学を専攻。教職員退職後、ふるさと岡崎にかかわる歴史・人物の著作活動を始め。2005年、岡崎長善館で「おかざき塾歴史教室」を主宰開講。2019年、全国歴史研究会特別功労賞受賞。新編岡崎市史調査員、前二松学舎大学大学院研究員。全国歴史研究会特別会員、ケーブルテレビミクス放送審議委員長、現在は「岡崎ふるさと歴史教室」主催。NHK文化センター講師。



○昨年は、NHKの「どうする家康」で盛り上がりましたが、私も関わっていました。脚本部のディレクターが来て“2、3問聞きたい”と。実際には2、3冊くらいいろいろ聞かれました。10月中旬まででしたが大変でした。脚本を作るためですが、自分が書いたものが使われたところもあります。言ったことと違う脚本のこともありましたがね。しかし、「作左」が登場しなかったのは非常に残念でした。浜松城でも岡崎城でも作左がしっかりして万端の備えをしていたから、簡単にはとられない城だと家康も安心して戦いができたのに、わかってもらえてない。

### 「大坂夏の陣 屏風」に描かれた戦いの悲惨さ



「戦国の終焉」… 混乱する極楽橋付近。大坂城内から脱出する人々、背負われる高貴な女性、鎧を脱ぎ捨てる武士。

大坂夏の陣屏風（黒田屏風）… 1615年（慶長20）に起きた大坂夏の陣の様子を描いた屏風絵。戦国時代最後の戦いの激烈さと戦災の悲惨さが迫真の描写で描かれている。六曲一双。六曲一双（ろっきょくいっそう）＝六枚に折りたたむことのできる屏風2隻。屏風を数える単位が「隻」。向かって右が右隻（うせき）。左が左隻（させき）。二隻一組の対（つい）が「双」。折りたたんだ時の面を数える単位が「曲」。面は右から左へ第一扇～第六扇という。上図は「左隻・第一扇」中段に描かれている。

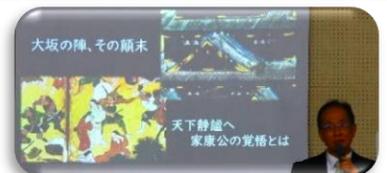
### 家康は、なぜ豊臣を滅ぼさなければいけなかったのか？



大坂夏の陣屏風  
「右隻」第六扇（最左端）に

「左隻」第四扇・第三扇に

「対」で見ると、大坂城は画面中央に描かれている（右隻5扇目から左隻1扇目）大坂城を中心にして、右から左へ合戦が推移するような構成になっている。



◆大坂の陣は2回あります。最初の冬の陣は和睦で終わり、夏の陣は豊臣の滅びる戦いです。この絵は「大坂夏の陣屏風」の中の絵です。右は、天守閣を大きくしてありますが大坂城です。見えるでしょうか、天守の窓から女官たちが不安そうな顔で戦の状況を見えています。

この屏風絵は、こんな様子まで細かく描いているんです。

◆この屏風絵は右と左の2つの屏風でひとつの絵ですが、大坂城はちょうど真ん中にあります。大坂城から右側の方には、両軍の勇猛な武将たちの勇ましい戦いの様子が描かれています。ところが、大坂城天守の左側の方には、(豊臣方が)負けて大坂城から逃げようとする敗残兵や庶民の、実に悲惨な状態が全面に描かれています。上の図の左側の絵はその一部です。女性が暴行される、命乞いをする兵を容赦なく殺す、激しい「乱獲り」が行なわれる(乱獲り=戦国時代から安土桃山時代にかけて、戦いの後で兵士が人や物を掠奪した行為)、悲惨な状況がこれでもかこれでもかと描かれています。

◆これが戦国時代なんです。この**残酷な戦国時代が終焉**を迎える、その最後の戦いを作者は描いているんです。終らせたのは徳川家康です。そんな意味で、私はこの屏風は、左側に注目して頂きたいです。屏風は大坂城にあります。ぜひ観に行ってください。

国の重要文化財

\*この屏風は、黒田家の所蔵品だったが、1958年(昭和33)大阪市に売却し、同市の所有(大坂城天守閣保管)となった。



## 大坂の陣の大きな背景

- ◆関ヶ原合戦後の浪人問題
- ◆秀頼の官位…二つの「御公儀」
- ◆豊臣氏の財力と庶民の人気

## 浪人の多くが大坂城に集結！

- ◆関ヶ原の戦いで敗戦した西軍の大名が処罰されたり、減封、改易になるのに伴って浪人が大量に発生しました。その数は15万以上とも言われています。その浪人たちが武器を持ってウロウロするわけですから、世の中は非常に危険になります。
- ◆関ヶ原の戦いで家康に味方した西国大名へ多くの加増をしました。この加増には“浪人たちを雇ってくれ”という意味があったのです。浪人一人を雇うには約50石必要ですが、10万石の加増で2,000人雇えます。浪人たちを再雇用するために高禄高にし

たんです。しかしそれだけでは浪人はなくなり、多くの浪人が大坂城へ集結することになり、そのことは「大坂の陣」の火種になっていくのです。

## 征夷大將軍と右大臣は同等の権力

秀頼は徳川の家臣ではない

どのようなことが行われたのか

- ① 豊臣秀頼に対する諸大名伺候の礼  
おもに西国大名たちへの公権力行使
- ② 勅使・公家衆の大坂参向  
朝廷内公家たちへの権力行使
- ③ 豊臣氏蔵入地の西国広域分布  
関ヶ原後も認めた豊臣氏の権力基盤
- ④ 江戸城天下普請に賦役を課さず  
同盟者として普請奉行を派遣要請
- ⑤ 慶長16年、諸大名による三箇条誓詞  
西国の諸大名に幕府の権威に従わせる



◆1605年(慶長10)、秀頼が右大臣となり、家康は秀忠に征夷大將軍を譲りました。これにより、諸国の大名はどちらに従えばいいのかという問題が起こります。

◆秀頼は右大臣になったことで、右表①~③のような権力を行使することになり、④については、同等の立場であるので徳川は賦役を課さず、「同盟者」として扱って、使われるのではなく支持する立場である普請奉行の派遣を豊臣に要請しています。

## 「三箇条誓詞」により諸大名を臣従させる

- ◆「2つのご公儀」による問題を危惧した家康は、三箇条誓詞に署名させることで諸大名の臣従化をはかりました。◎
  - ◆1.「源頼朝の時のように、將軍家が定めてきた法式に従うこと、江戸の將軍・秀忠の法度を堅く守ること」、2.「法度に背き、また將軍の上意に従わない者は、それぞれの国に隠し置いてはならない」、3.「抱え置く侍が反逆・殺害人であるならば、その者をかかえないこと」
- 反逆・殺害人とは浪人のことです。大坂に言っています。
- ◆西国大名は、この誓詞に名前・花押（かおう）し、武家の頭領と権力を秀忠が持つことを承認しました。

翌年は東国大名が將軍家への臣従を誓った。その後、中小クラスの譜代・外様の大名も。そこに秀頼の名前はない。この誓詞は武家諸法度の先駆とも言われる。

- ◆そのあと、家康と秀頼は二条城で会見しますが、その時家康は、秀頼と同盟者として一緒にやっいていこうという考えでした。殺してしまうという気はなかったのです。
- ◆しかし、多勢の浪人が集まる大坂城は深刻な事態であり、全面衝突を避けるためには大坂城を開け退去させるしかない状況でした。

秀吉以来の豊臣家への人気  
豊臣家の持つ圧倒的な財力  
秀頼の人間的な成長ぶり

大坂城が持つ「反徳川」の圧倒的な存在感

秀頼を徳川政権下の一大名として  
大坂城から退去させる

## 方広寺・鐘楼



## 国家安康 四海施化 万歳伝芳 君臣豊楽

\*「家」と「康」に分断して家康を呪詛している。  
\*豊臣を君主として皆を楽にするという意味ではないか。  
ということで難癖をつけたと言われています。

- ◆しかし、実際には五山の僧の見解では、呪詛意図は認めず、問題なのは「家康」という“諱（いみな）＝身分の高い人の実名”を使ったことが不遜（「諱」で呼びかけることは親や主君などのみに許され、それ以外の人間が行った場合は極めて無礼であると考えられた）だということで、それが問題にされたんです。

大坂の陣の引き金

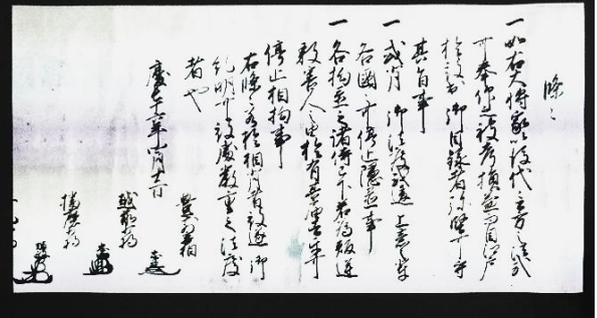
方広寺大仏殿  
開眼供養に合  
わせて鑄造



君臣豊楽

国家安康

## ◆統制策



◆如右大將軍以後、代々公方之法武可奉仰之、被考損益而自江戸於被出御目録者、弥堅可守其旨事

◆鎌倉幕府以後の法令と同じく、江戸幕府の法令を守ること

◆或背御法度、或違上意之輩各、国々可停止隱置事

◆法令に背いたり、將軍に従わない者を匿わないこと

◆一各、抱置之諸侍已下、若為叛逆殺害人、於有其屈者、互可停止相抱事、右条々若於相背者、被逐御糾明、可被処嚴重之法度者也

◆叛逆や殺人を犯しそうな者がいれば追放すること

◆右の掲げた条々について叛く者は糾明され、厳しい処分を受けるものである

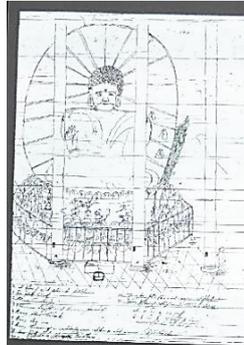
慶長十六年四月十二日  
外様大名花押

条々

## そこで起こった「方広寺鐘銘事件」

- ◆豊国神社は豊臣秀吉（豊国大明神）を祀る神社です。本殿正面に建つ唐門は南禅寺金地院から移築されたものですが、元は伏見城にあったもので国宝です。

- ◆方広寺は豊国神社の隣にあります。方広寺の鐘楼は今もあります非常に大きいです。写真の人と比べるとよくわかります。方広寺大仏・大仏殿が再建され落慶供養の準備が進められる中、1614年（慶長19）に鐘楼と梵鐘も完成し、梵鐘に入れた銘文で問題が起きました。



大坂の陣の引き金

「方広寺鐘銘事件」

日本一の高さを誇っていた方広寺大仏（京の大仏）のスケッチ（エンゲルベルト・ケンペル）



「呪詛はないと考えられるが、そもそも諱を使うということが前代未聞、大変失礼なことなのだ」

五山の僧

文英清韓

作者

「国家安康とは、大御所呪詛の意図がある」と断定

林羅山

## 片桐且元の和解工作ならず

- ◆1614年（慶長19）8月、豊臣家は鐘銘問題の弁明のため、片桐且元を駿府へ派遣します。しかし、家康には会ってもらえませんでした。代わりに、本多正純と金地院崇伝（こんちいんすうでん）と交渉します。
  - ◆そこで且元は、戦いをしなくてもすむような条件を提示しました。（右図参照）
- 大坂に戻った且元は三条件のどれかを受け入れるべきと進言したが、重臣からも家康との内通を疑われるようになり、1614年10月1日、片桐且元は一族と家臣を連れ大坂から逃げ延び、弟貞隆の居城茨木城に戻りました。且元は後に家康につくこととなります。
- ◆このことにより、豊臣は徳川との交渉の窓口がなくなり、大坂の陣への流れが加速しました。
  - ……1614年（慶長19）11月19日開戦。

且元が示した三条件（いずれか一つ）

- ・淀君か秀頼を江戸に参勤させること
- ・大坂城を退去し大和郡山か伊勢に移ること
- ・大坂城の浪人たちを退去させること

↓

淀君や側近たちの激怒

↓

片桐且元の追放 徳川との交渉の窓口を失う

## 大坂城内の強硬派 大名はいない～大坂冬の陣開戦

## 攻めにくい大阪城



- ◆この人たちが大坂の陣で豊臣方の中心になった人です。木村重成（豊臣秀次の元家老）、真田信繁（真田昌幸の子・幸村）、明石全登（宇喜多秀家の元家臣）、長宗我部盛親（元親の子・長宗我部氏最後の当主）、後藤基次（黒田長政の元家臣・又兵衛）。
- しかし、この中に徳川政権下で藩を持っている大名は一人もいません。大名は誰も来なかったんです。

- ◆大坂城天守は、内堀・外堀で守られています。さらに、惣堀（城下町が中にあり、その周りをぐるりと囲んだ最も外側の堀）があり、その内側に兵がいます。水で囲まれた頑強な城です。固めていれば攻めにくいんです。しかし、南側が弱いと真田信繁が外に砦を築きました。「真田丸」です。

大坂冬の陣屏風

大坂冬の陣屏風・真田丸の戦い



- ◆上図は、淀川を渡る徳川軍の「仕寄せ」（盾や竹の束で身を守りつつ、城を攻めるための簡易な基地。主に鉄砲対策）の様子。天満橋は破壊されていたので土嚢を積み・塹壕を掘って近づきました。「仕寄せ」は城に接近する行動です。
  - ◆徳川方は、備前島に大砲（ガルバリン砲と和製大砲）を持ち込み、昼夜を問わず大坂城を砲撃しました。
- \*結果、このあたりが勝敗を決する場所となったのです。

- ◆出丸（本城から張り出して設けられた曲輪（くるわ）のこと）を構築しての戦い。真田丸は、武田流丸馬出（まるうまだし）という半円形のものでした。ここを徳川方の井伊、前田などがせめて何千という死傷者を出したのです。

# 大坂冬の陣 和睦が成立 12月19日



戦況を一変させた  
備前島配備のカルバリン砲  
(イギリス製)

又諸手の仕寄に山を築。山上より惣構へ大筒を打入しめらる。備前島管沼織部正定芳が陣よりは。大筒百挺連發せり。此時寄手各惣構の堀へ。廿間卅間よせて竹束をつき。土俵を以て山を築くゆへ。城中より鐵炮しげく放といへども。さのみ毀傷する者なし。

## 和睦の条件と内容

豊臣方の示した内容

- ①本丸以外の二の丸、三の丸の破却及び惣構を埋める
- ②淀君を人質としない代わりに、大野治長と織田有楽斎の子を人質として差し出す

徳川方の示した内容

- ①秀頼の身の安全と本領の安堵
- ②城中諸士については不問とする  
(秀頼が加増をしない)



大野治長 (夏の陣屏風)

◆大坂城天守に打ち込まれた砲弾に、秀頼も淀君も戦意を失い、豊臣方は和睦に傾いていったのです。豊臣は、上の右図にある和睦の条件を出しました(二の丸・三の丸を壊せば内堀・外堀も埋めるのは当然です。惣構=城・城下町に敵兵の侵入を拒んだ最前線の防衛ラインのこと。「土塁」と「堀=惣堀」で構成される)。徳川はそれを受け入れ、①秀頼の身の安全と本領安堵、②城中諸士(=籠城浪人)の不問(但し、秀頼が浪人に加増しないこと)ということを約束し和睦は成立します。

◆破壊・埋め立ては、豊臣方と徳川方で行なわれましたが、1615年1月24日に終了し、大坂城は本丸だけの姿になりました。しかし、大坂城には浪人がまだとどまっております火種は消えていません。

## 1615年3月5日 板倉勝重から家康に報告が

◆そんな中、3月5日に京都所司代の板倉勝重から、豊臣方の不穏な動き(大坂城の堀の掘り起こしや浪人の増加など)が伝えられます。家康は、浪人たちが町で乱暴を働いている事を理由に、豊臣家に「浪人を解雇する」か「別の土地に移る」かのどちらかを選ぶよう通達します。

## 大坂城は和解案でまともらず 秀頼も押し込まれて徹底抗戦へ！ 大坂夏の陣始まる

本丸周りの堀は掘り返されたが、裸同然になった大坂城

城内の意見は分かれたが徹底抗戦派が優勢



埋められた惣構と外堀の一部

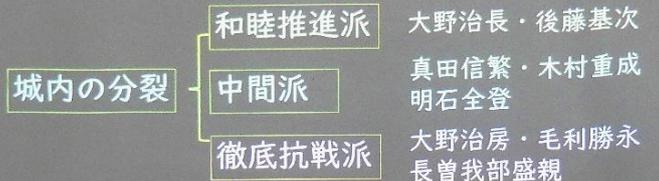
浪人衆による掘り返し

板倉勝重による家康への報告

大坂夏の陣  
布陣図  
元和元年  
五月七日

## 織田有楽斎の苦悩と出奔

『駿府記』(二木謙一氏論考)



和解案拒否

- ・大坂城を退去して大和国か伊勢国に移ること
- ・大坂城から浪人を退去させること

## 4月18日 家康 二条城に入城 家康の覚悟 “これを限り”

將軍家は四月廿一日伏見に着せられ。その日二條へ渡御ありて御對面の折から。君には来る廿八日に御出馬あるべしと仰出されしかば。將軍家城和泉昌茂を御使として。北國奥羽の勢の上るを待せられ。五日過て御出陣あらせられんかと聞え上給ふ。君こたび城兵。寄手の着到を待合せて戦はん心なれば。遠國の者が来るをまつまでもなし。見兵もて戦はんとて聞せ給はず。よて將軍家かさねて二條に渡らせられ。御みづから諫め給へば。昨日和泉にも申せしごとく。野合の戦は勢の多少によらず。かつ我老年にをよび。是を限りの戦なれば。先陣はわれ打むと仰らる。

是を限りの戦い

秀頼の母淀殿や側近の大野治長らは、大坂城の退去に同意しました。しかし、長宗我部盛親・毛利勝永・仙石秀範ら牢人衆は、徳川方に徹底抗戦することを訴えたのです。結局、秀頼も牢人衆に押されて、徹底抗戦することを決めました。

歴史学者。父は小和田哲男

小和田泰経氏

秀忠、4月21日に伏見に。先に二条に来ていた家康に“まだ出馬するな。北国・奥羽から加勢が来るまで待て”と使い。家康は、遠くのものがあるのを待つ必要はないと。秀忠自ら二条に行き、重ねて“やめるように”。が、“いや数ではない”と

◆家康は、①この戦は勝てると思っていた。②最後の戦い(戦国の終焉)にと思っていた。③〔秀忠には〕お前は来るなと言ひ、老年になった自分が悪者になって、なんとしてもウミがたまつた豊臣を滅ぼすのだと。「これでもう悲惨な戦国の時代を終りにするんだ」、という家康の覚悟が伝わってきます。

五月七日に、御所様の御陣へ、真田左衛門仕かかり候て、御陣衆追いちらし、討ち捕り申し候。御陣衆、三里ほどつ逃げ候衆は、皆みな生き残り候。三度目に真田も討死にて候。真田日本一の兵、古よりの物語にもこれなき由、惣別これのみ申す事に候。

(薩藩旧記雑録)

真田信繁の奮戦

真田は味方の諸軍乱走るも機を屈せず、魚鱗に連なりて駆け破り、虎韜に別れては追い靡き、蜘蛛手十文字に掛け破らんと、馬の鼻を双べて駆け入り、其の速かなるは疾雷の耳を掩ふに及ばざるが如し。

(大坂覺書)



豊臣秀頼本陣千成瓢箪の馬印が描かれるが、秀頼本人はいない。淀君の反対があったという



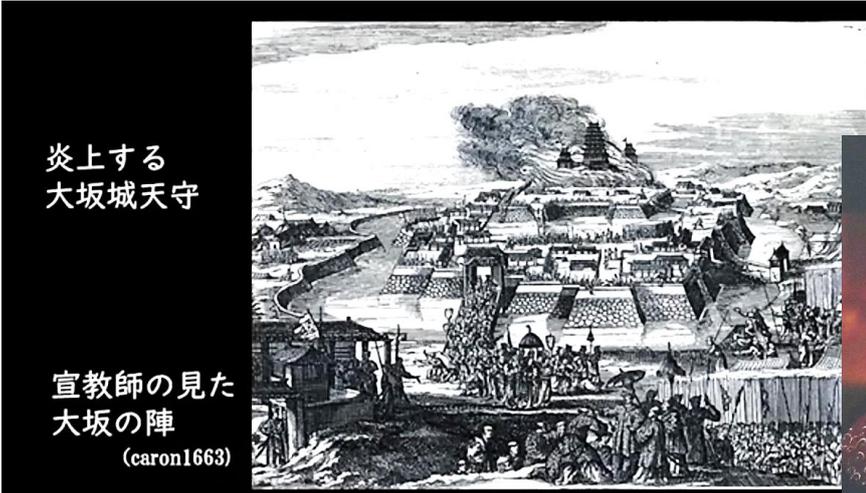
大坂夏の陣最後決戦 武将配置

本多作左衛門重次の嫡男

「本多成重」

大坂両度の陣には越前勢の中心となって目ざましい活躍をした。とくに夏の陣では、三〇〇騎を率いて真田幸村の軍を破り、大坂城討入り一番乗りの功名をたて、恩賞として家康直々に国光の刀と三吉野の茶壺を与えられ、従五位下飛騨守に叙任された(『徳川実紀』)。 『福井県史』より

作左は1596年没。大坂では息子(おせん=仙千代)が頑張った。



炎上する大坂城天守

宣教師の見た大坂の陣

(caron1663)

「豊臣秀頼・淀殿ら自刃の地」碑



大坂城内山里曲輪跡

千姫の懇願  
— 秀頼母子の助命嘆願

落城後秀頼母子は芦田曲輪に籠り、御出城ありて。母子助命の事を。本多佐渡守正信もてこひたてまつられしに。御姫が願とあらばそれにかまはずべし。秀頼母子をたすけ置たればとて。なでう事かあらむ。汝岡山へゆき將軍にも申てみ候へとの仰にて。正信岡山に参りそのよし申上れば。將軍家は御氣色以外の外にて。何のいはれざる事をいはずとも。なぜ秀頼と一所にはてざるぞと宣へば。正信うけたまはり。ともかうも大御所の思召に任せらるべしと申て。姫君の方へも参りかくと申し。扱八日の朝にいたり。兩御所御參會ありてしばし御密談あり。諸人のうけたまはる所にて。將軍家にむかはせられ。必秀頼をば助命し給へ。こゝが將軍の分別所なりと宣へば。將軍家仰はざる事なれども。數度の叛逆此上はもはやたすけ難しと宣へば。老人のかくまでいふを聞かれねば。このうへは力なし。心にまかせ給へとて。いと御不興の御様に御座を立せられしが。ほどなく井伊が頼はじめ悉生害ありしよし聞えし。秀

- 5月7日 大坂城落城。千姫・脱出。
- 5月8日 秀頼・淀君自害。豊臣家滅亡。大坂夏の陣 終結。

秀頼の助命を許さなかったのは家康ではなく秀忠  
◇千姫は大坂城を脱出し、頼まれていた秀頼と淀君の助命嘆願をした。家康はそれを聞き入れ、秀頼だけは助命しようとしたが、秀忠が助命を許さなかった。そして、秀頼と一緒に死ななかつた千姫を責めた。家康が直接説得しても、数度も謀反を起こしているのもう助けられないと聞き入れなかつた。秀頼たちはそれを察し自害した。

新しい秩序の時代へ

# 元和偃武

武を偃せる

刀を抜かない平和の形

## 大坂夏の陣が終わり、戦いのない時代の到来

元和 … 江戸時代の1615年から1624年までの、後水尾天皇の代の元号。大坂の陣後、慶長から改元した(7月)。

偃武 … 武器を伏せてしまっておくこと。

元和と改元されてから戦乱もなく、徳川氏の政権は250年余にわたって安定した(大名の間の戦争が絶えた)。このことを元和偃武(げんえんいぶ)という。

法による武士の支配

「武家諸法度」



金地院崇伝

徳川家康は  
何を心配していたのか

社会秩序の安定的な継続  
国家大乱の再発

役人(大名や武士)の倫理観と心得

以心崇伝；通称は金地院崇伝(こんちいんすうでん)。安土桃山時代から江戸時代の臨濟宗の僧。徳川家康のもとで、外交、寺社行政、法律の立案等に携わり、江戸時代の礎を作ったとされる。黒衣の宰相と言われた。1569-1633。

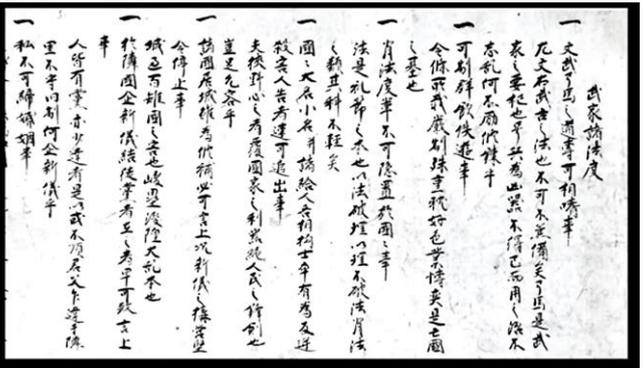
### 「武家諸法度」の制定 … 武士の本分と諸大名への規制 (1615年・元和元年)

- ◆ 武士同士の争いを防ぐ手立てとして、「武士のあり方」を示す。
- ◆ 家康が、金地院崇伝に作成させ、2代将軍秀忠の名で公布した。
- ◆ 1611年に家康が大名から取り付けた三箇条誓詞が元。これに金地院崇伝が起草した10箇条を加えた。

**武家諸法度 (元和令、崇伝の草案)**

一、文武弓馬の道、専ら相嗜むべき事。文を左にし武を右にするは、古の法也。兼備せざるべからず、弓馬は是れ武家の要枢也。兵を号んで凶器となす、已むを得ずして之を用ふ。治に乱を忘れず、何ぞ修鍊を励まざらんや。

一、背法度輩、不可隠置於国々事。法之礼節本也、以法破理、以理不破法、背法之類、其科不輕矣。



#### 武家諸法度(元和令 全13条)

1. 文武両道に励むこと(学問と武術をみがく)。
2. 酒におぼれ遊びに呆けてはならない。
3. 法令に背いた者をかくまってはならない。
4. 自分の国に反逆人や殺害者がいたら、追い出さなくてはいけない。
5. 自分の領地に他国の者を住まわせてはならない。
6. 居城を修理する時は、必ず届け出をすること。新築することはかたく禁止する。
7. 隣国で何か変わったことをしたりする者がいたら江戸幕府に報告する義務がある。
8. 諸大名は、幕府に許可のない婚姻は禁止する。
9. 参勤交代時に、決められた人数以上の家来を連れてきてはいけない。
10. 身分の上下を間違えない服装にすること。
11. 身分の低い者の駕籠の使用を禁止する。
12. 武士たちは質素儉約に努めること。
13. 諸大名は、能力あるものを用い、良い政治をしなければならない。

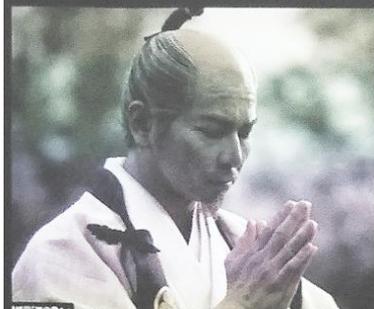
**武家諸法度 (元和令、崇伝の草案)**

一、諸国の居城、修補をなすと雖、必ず言上すべし。況んや新儀の構宮堅く停止せしむる事。【中略】

一、諸大名参勤作法の事。続日本紀制して日く、公事に預らず、恣に己が族を集むるを得ず云々。然れば則ち多勢を引率すべからず。百万石以下二拾万石以上二十騎を過ぐべからず。十萬石以下は其れ相応たるべし。蓋し公役の時の其分限に随ふべし。

元和元年七月七日

# 家康の遺言より



『東照宮実記』附十六」  
 わが命旦夕に逼るといへども。將軍かくておはせば天下の事心やすし。されどももし將軍の政道その理にかなはず。億兆の民艱困することあらんには。誰にてもその任にかはらるべし。天下は一人の天下にあらず。天下の天下なりと聞ければ。たとひ他人天下の政務をとりたりとも。四海安穩にして万民その仁恩を蒙らば。これ元より家康が本意にして。いさゝか憾みおもふ事なし。

我が命は終わりに近づいたが、將軍（秀忠）が立派に政治を行っているので、天下のことは心配していない。しかし、將軍の行う政治が道はずれ、多くの人々が苦しむことになれば、誰でもその座に変わるがいい。天下は一人のためのものではない。天下はすべての人のものであり、そのすべての人のために天から任されたものである。たとえ、他の者が天下を治めようとも、四海安穩で万人の幸せになるのなら、これは家康の望むところである。

◆ “天下はひどい時代があった。戦国時代はひどく悲惨な時代だった。それを

をなんとかしたいということで天下を取ることにした。今は平和な時代になっているが、もしそれが乱れそうであったら、誰でもいいのでそれをやめさせてくれ”と言っている。“別の者が將軍となっても善政を行なうなら、それは自分の望むことなのだ”という「家康」の素直な気持なのではないか。



◆この遺言は岡崎城天守のすぐ下の石版（家康公遺言碑）に書かれています。岡崎公園に行ったときは見てきて下さい。

## 最後に…



「猿候促月図」(長谷川等伯)

度量の広い事ほどよいことにはないけれども、それより身の程を知らず、あらゆる事に程度を超して華やかに、身分以上の知行をあてがったり、人に物を恵み与え過ぎるのも、度量が広いといえませんが、自分自身か得意になりすぎたというべきです。

度量の広い事ほどよいことにはないけれども、それより身の程を知らず、あらゆる事に程度を超して華やかに、身分以上の知行をあてがったり、人に物を恵み与え過ぎるのも、度量が広いといえませんが、自分自身か得意になりすぎたというべきです。

「猿候促月図」(長谷川等伯)

◆上図右の文は、「大三川志」（1542年の徳川家康の誕生から元1616年の死去までを中心とし、1664年までの記事を含む編年史）に収められた手紙；庭訓（ていきん=家庭の教え）状にある文章。秀吉のことを言っています。

◆左図は、南禅寺金地院の茶室の襖絵にある「猿猴捉月図（えんこうそくげつず）」。猿が樹上より水中に映る月影をつかまえようとしている絵ですが、もともとは仏典に出てくる物語で、『欲に駆られて身のほどを忘れると命を落とすことをいさめた絵』『昔、インドの波羅那城で、

500匹の猿が樹下の池面に映った月を取ろうとし、互いに他の猿の尾をつかんで高い枝を下りて池に臨んだが、ついに枝が折れみな水に落ち溺れ死んだ、という例えて、仏陀が僧たちをいさめた』ものです。家康公が武士たちに示した教訓そのものです。

作左の会 検索



一筆啓上・作左の会

お疲れ様でした。🍵

<http://sakuza.g1.xrea.com/>

(記) 竹内 喜則